

村八分について

住職 谷川 寛俊

昔から「村八分」と言う。同じ共同体に生きる以上、どんな仲たがいたり喧嘩していたとしても火事とお葬式の時だけは助け合おう、という意味である。

つまり嫌な奴とは八分は付き合わなくていいが、火事と葬式にまで協力をしないようでは人間じゃない、人間ならその二分は別に考えましようということだろう。

確かに火事やお葬式は無条件に助けが欲しい。最近では葬儀屋さんがかなりの部分を準備してくれるし消

火器も家庭に置いてあったりするが、それでもご近所の助けを全く借りないで事を済ますのは火事でもお葬式でも不可能だろう。

どだいご近所に迷惑をかけなで生きて生けると思うのがおかしい。よく「世間様に迷惑をかけないように」と昔の人は言ったものだが、それはたぶん、どう生きようと我々は人に迷惑をかけないでは生きられないという認識に立った上での言葉だろうと思う。

悩み事があって仏頂面ぶつちようづらで表を歩く事も道行く人には迷惑である。元氣も病氣も人に移るから、病氣になるのも迷惑だし、暗い気分です街に出る

のも迷惑だ。だとすれば、誰でも他人に迷惑をかけないでは生きていけないと分るだろう。

最近「自立」という言葉がもてはやされる。こんな言葉を聞くと、なんだか自分だけでも生きてゆける気分になりかねないが、それができないという認識で「人」という文字には「支え」があるのではないだろうか？もたれましよう、と言いたいのではない。どんなに自立したつもりでも、そこを支えてくれているを意識すべきではないか、と申し上げたいのだ。

「自立」した優秀で立派な人間どうしは、よく喧嘩する。つまり自分の

ことをそう思っているから他人への批判にもなり、批判が批判を呼んで増幅してしまう。片方が自分をバカだと思っていればここまで行かないだろうに、という場面でも、両方が優秀で立派だから後へは退けなくなる。離婚がどんどん増えるのも、自立した優秀な立派な人が増えているからではないだろうか？

自立する事は大いに大切な事だと思う。しかしその同じ状況を「自分は自立なんか出来ていない」と認識する事がもっと大切だろう。見渡せば一人で出来ない事ばかり。毎月発行しているこの「人生ハンドブック」だって、確かに私が中心になって原稿

を書かなければ実現しないけれど、
そうできるのは周り（副住職や家内）
が動いてくれているお陰だ。特に家
内が編集、パソコン入力してくれて
いるお陰である。

自分が完全な人間であろうとするの
は、何か方向性がすでおかしいよ
うな気がする。素直に「助けて」と
言える事の方が大切ではないだろう
か。火事やお葬式では妙なプライド
を捨てて助けを求める。そして素直
に感謝する。それこそ生活力ではな
いだろうか。

それでも助けてくれないとすれば確
かに世も末だろう。人間の社会では
ないのかもしれない。しかし周囲の

冷淡さを非難する前に、自分が心か
ら「助けて」と言ったかどうか、そ
ちらの方を先に気にすべきだと思う。
世間が正しいとは限らない。このこ
とは例えばレプラ（ハンセン病）の
患者への扱いを持ち出すまでもなく、
歴史には多くの証拠がある。しかし
それでも人は「和」を重んじて暮ら
すべきなのだと思う。「和え物」を見
れば明らかのように、人は他人と接
する事で思ってもいなかった味を出
せる生き物なのである。

村八分は仕方ないとしても、残り
の二分はどんな嫌いな人間に対して
も開いておきたい。村十分だけは人
間である以上避けたいものだと思う。